

# 津 輕 信 明 の 庚 申 待 ・ 甲 子 待

## 小 館 表 三

(一)

本誌才三十三号に「近世津輕の庚申塔」と題して、津輕地方の庚申信仰の一端を庚申塔を通して述べた。その時、幾つかの問題点を提示して大方諸賢の御指導を御願いしたところ、窪徳忠博士から早速、激励と御指導をいただいた。また、弘前市史藩政縮附録の史料解説中の「弘前藩日記」(本書に目録連載)について、「此の日記に庚申関係のものが得られるのではないでしようか」との御注意をいただいた。以来、日記等を眺む時は十分注意して来たり、去夏より始めた「弘前藩日記目録」作成の際も目を注いで来たが、目下のところ特に見当らない。ところが去る一月、文部省史料館に「津輕家文書」を調査に行った時、津輕八代藩主信明の「在國日記」<sup>③</sup>を見る機会を得、藩主の庚申待、甲子待行事の記事を見ることが出来たので、庚申信仰研究の一端として述べる次第である。

(二)

窪博士の諸研究に<sup>④</sup>庚申、甲子待の諸相は詳細に述べられているが、その多くは公家や庶民のものであるが、此の日記のような、大名自身の信仰行事はきわめて少ないのである。

次にその日記中の庚申、甲子の日と、行事の記事との関係を一覽表にしてみよう。

年	月	日	種 類	記 事	巻 数
① 天明四年	九月	八日	庚申	有り	一
全	九月	十二日	甲子	無し	一
全	十一月	九日	庚申	庚の亥	二
② 全	十一月	十三日	甲子	有り	二
③ 天明五年	一月	十日	庚申	有り	三
④ 全	一月	十四日	甲子	有り	三
5 全	三月	十一日	庚申	有り	三
6 全	三月	十五日	甲子	有り	三

天明六年十二月廿一日 庚申 無し 四  
 十二月廿五日 甲子 無し 四  
 天明七年 二月廿一日 庚申 無し 五  
 二月廿五日 甲子 有り 五  
 天明八年 六月廿九日 庚申 無し 七  
 七月 四日 甲子 有り 七  
 九月 一日 庚申 無し 八  
 九月 五日 甲子 有り 八  
 十一月 二日 庚申 無し 九  
 十一月 六日 甲子 有り 十  
 天明九年 一月 三日 庚申 有り 十  
 一月 七日 甲子 有り 十  
 寛政元年 三月 四日(三日)庚申? 十  
 三月 七日 甲子 無し 十  
 以下、寛政二年五月—十二月(十一—十四)、寛政三年一月—五月(十五、六)には待行事の記事無し  
 右のうち〇のあるのを次にかゝけ、そのうち①は日記の  
 大要を掲げて待行事の記事の位置をみていたゞく。

①天明四年九月八日 申 陰晴風立寒今朝岩木山

雪見巾

一六半時超五時過朝食四時供寄せ申付同村過靈殿江  
 拜夫々直ニ報恩寺江参詣九時前帰城  
 一昨日□出大赦申渡之融書之□加筆いたし今朝半紙

内膳江遣請書もいづる

一九半時過夕食

一右已前於四季之間内膳に逢ふ之處目見額出候願之  
 通申付之事 ○徒目付……………○槍目付……………

○家老……………

右いづれも申出之通申付之事

一諏訪門兵衛 高岡御神領之儀……………

一七時頃多膳甚五左衛門目通致慶旨申出……………類冬

之向に出座兩人一所ニ罷出此向而兩人……………

①今日庚申ニ付吸物酒有伺出夜食後申付候而相伴医

者三人尤菊八□□□へものまける也五半時相消四

時寐る

②天明四年十一月十三日 甲子

一六半時夜食已後甲子ニ付吸物酒有申付医者三人相

伴四時過寐る

③天明五年一月十日 庚申

一六半時夜食今日庚申ニ付引続吸物酒有医者三人相

伴

一四時過相消四半時寐る

④天明五年一月十四日 甲子

一七半時過参る六半時過夜食引続吸物酒有□□医者

相伴四時相清寐る

⑦天明七年二甲廿五日 甲子

一八過夕飯六半時夜食右已初甲子付前於西湖之間大黒天に参詣九過寐

⑧天明八年七月四日 甲子

一今日甲子ニ付六時於西湖之間大黒天を拜畢而奥にて夜食引続吸物酒有如例申付匠者相伴四半過御口

⑨天明八年九月五日 甲子

一今晚子待ニ付大黒天祭る後服中ニ付飾付等ハ如何致鏡口役代拜相勤様孫市江申付之

⑩天明八年十一月六日 甲子

一今日甲子ニ候ニ付大黒天飾付申付服中ニ付鏡口孫市代拜申付之

⑪天明九年一月三日 庚申

一五半頃於奥夜食引続吸物酒有匠者相伴四半過寐

⑫天明九年一月七日 甲子

一今日甲子ニ付暮時髪目半上下着於西湖之間拜一六半頃夜食引続吸物酒有口匠者相伴九時寐

石のように庚申待行事と甲子待行事は殆ど同じで、江戸中期以降は混同しているようだが、今庚申に關してみると、匠者が相伴している事は庚申信仰の本體である延命靈災を前提としてみるとみてよいのではなからうか。また行事は城中の奥に於てしていることは個人的信仰形態であることに注意すべきとあらう。次に「吸物酒肴」を飲食することであるが、「一條良輝公記」の中にみられ、最初は安永四年一月十二日の庚申の項「……有庚申待。如何し」(澤徳忠、庚申信仰の研究)で、十一月十六日の庚申の日に「……右ニ付夜食設如何し、引続き安永五年の庚申の日毎に「夜食如何し」とあり、十月廿二日「庚申待ニ付夜食酒肴有如何し」と内容が見え、以後「夜食如何し」とが、「給酒肴等」等が罷え、寛政七年に至っている。また「華頂要略」巻五三、文政十年九月十七日の項に「庚申会也。恒例月次講同差出ニ付……從禁裏御所御使岡田右兵衛少尉参入之節。於御内室使者門。吸物酒式重扶ニ而被下之。……」(澤徳忠、庚申信仰)とあることから、信明の行ったのも大体此の公家の風のように思われるが、他に例をみないので、どれ位一般的であつたかわからない。

次に甲子待ではあるが、⑨・⑩にみられるように、服中であるので鏡口役に代舞させたところがあるが、これも「揮良公記」の天明六年十二月廿一日庚申の日に「八坂庚申代参无之。先例服中依不「明也」(三浦篤、八坂)とあるこ

とから、自り行事をしないでも同じ傾向であろう。

なお、庚申の特徴である、徹宵の事であるが、前述の史料の通り大抵午後11時から12時に寝ている。これは信明の日常の就寝時と大差はない。

同じ津輕家文書の「土風一振ニ付建白寛」(文化九年一九月代寧親代一費田十郎右衛門、岡本平馬)の一条に、

一(前略)

一於御國許御徒然之儀ニ付御家老初御懇ニ被為召可然  
旨申上御居間或者奥ニ而御酒宴之儀申上候得共御  
先代様ニ而不被遊御儀者不被仰付御方可然御儀

但御月見或者庚申甲子巳待之類 御先格御糺シ之

上御書役御医師江御酒被下候類者御格別之御儀

一(後略)

とある。土風一振の建白書においてさえ、一庇、庚申、甲子、巳待の類が認められていたこと、また、御先格とあるから、すでに行われていたことは、前記の日記に相応するものであるし、また、医者が常に関連している点から延命息災に関連があると推察しているのではなからうか。

なお、巳待到窮しては、みられない。信明の日記にしても、庚申の日に行事が記されていなくても、日付の干支が、他の日は、巳、午、未等しかないのに、わざ／＼「庚」を加えていて、特に注目しているのに、己巳の日はそれがない。

### (三)

ついで、信明の日記以外の、藩・藩主関係の記録に庚申等の記事は至って少く、管見ではあるが、次に述べるようなもので、特に藩主自らの信仰に關したものはみられない。

本誌前号(三八号)に荒井清明氏の紹介した「信枝君一代之自記」(文部省史料館)に次のような記事が二、三見られ、一庇庚申の日の特異性を承知していたことがうかがうことが出来るが、二代藩主信枝個人の信仰を意味するものでないことは信明の場合と異なる。

1. 天正拾九年卯年

九月十一日夜半大風、但庚申ノ夜ナリ

2. 寛永四丁卯年

八月庚子ノ日六日ニ古懸ニテ御神案ヲス 其ノ日  
亦汗御力丰被成、同廿六日巳ノ刻ニ不動(古懸不  
動尊)錢ヲ被振成……………。

3. 寛永五戌辰年

九月二日千ノ苞ニ氷フル大キサ七十目八十目但シ  
大小アリ 庚申ノ日

記事全体は前号に紹介されて御承知の通りであるが、元和九年五月廿日にも氷が降ったが、此の日は庚戌の日であつても、干支を書いていないのに反し、庚申の日はわざ／＼付け加えているし、現在でも庚申の日は「庚申

アレ」と称して天氣の悪いことに使用している。古懸不動尊の汗をかく事は、領内に異変が起る前兆として恐れられている事である。一の天正拾九年九月十一日は庚申の日でなく、庚戌の日なのに庚申の日と付け加えているのも、その辺の事情を物語るものであろう。

また四代藩主信政の時期に東申南條の文獻が存することとは既に発表されているところであるが、「信義公御代日記」(三代藩主)、「信政公御代日記」等には、俗信仰的なものは見られないし、このほか、九代寧親の日記も一見したところ、そのようなことは見られない。

#### (四)

以上の様に八代藩主信明の在國日記に拾つてみたが、此の外、津輕藩南條の日記的史料は当弘前にも、東京文部省史料館にも相当保存されているので、たんねんに見てゆくならば、更に新しい記事が発見されることと思う。終りに向題点をいくつか挙げて大方の御指導をお願いする次第である。

一、信明の庚申待と甲子待の相違点について。

甲子の日には西湖の向で大黒天を拜するが、庚申の日には、特になにかを拜した記事がない。

二、吸物、酒、肴等を飲食する目的、及びその内容(何の吸物、何の肴か)について。

三、史料「士風一振に付建白竟」の先格とあるが、

前代、後代についての究明。

四、在國日記には本稿のようによく待行事が記述されているが、江戸に在府の時は待行事をしたのであるうか。

五、藩主の行った此の信仰行事は家臣にどんな影響を与えたものであろうか。此の点に關して、参考までに次の事をあけておく。明和―安永―天明―寛政―文化―文政と庚申塔が多く造立され、茂森の山根の天保三年造立の庚申塔の造立の一倉に士分と思われ、八反田縫文並(森町在住)、菊地玄宅(塩分町在住)の名が見えるが、今後弘前市における、江戸時代造立の庚申塔の造立者氏名を探究整理することによって一層明かになると思われる。

註① 拙稿「近世津輕の庚申塔」(国史研究)に「信濃では七二三基の庚申塔のうち、篠田彦がわずかに四基(〇六%)にすぎない(信濃教育会編、農村信仰誌(庚申塔は篠田彦、昭和18年刊、引用))」

に対して窪博士は「信濃地方の篠田彦塔の少いことは、調査者が庚申塔であることを知らないために、わずかに四基しかない統計になったのである点を考慮に入れるように」と。

② 信明 七代藩主信寧の長子、宝暦十二年六月廿二日(一七六二)、弘前城に生る。幼名熊五郎、また松五郎、始出羽守、後土佐守。安永六年(十六才)

叙爵、同七年（十七才）元服、天明元年（二十才）土佐守、天明四年二月廿日（廿三才）襲封、寛政三年六月廿二日（一七九一）江戸にて死去（三十才）。若年より英讀の習高く、十四才で救生組係の内人守佐美恵助に儒學を学ぶ。細川銀台侯（熊本藩主重寶）等に高く評価され、また次のような逸話がある。

「或る時、家翁公（松平定信）、今御譜代の諸侯に御老中となるべき俊傑の人あるを覺えず、貴公、外様の列候なれども、古の例もあれば御老中に推挙せんと思ふなり、と仰せければ、公（信明）仰せけるは、今封内の民凍餒の患（天明の飢饉）あるのみならず、家中扶持さへ届かぬに、天下の政に関らん事いかでか、と仰せあつて深く御辞退なされけると云し（老譚）にその人となりかうかがわれると思うが、信政に必敵する名君であつた。惜しい哉、三十才にして死去している。その日記の内容等からしても、鋭意藩政のたてなおしに、特に天明の飢饉対策を行い、備荒貯米制度は以後の凶作から領内を救つてゐる。

③ 信明在國日記 内訳

才一巻	天明四年八月廿日	九月末日
才二巻	天明四年十月朔日	十二月廿九日
才三巻	天明五年正月一日	三月十五日
才四巻	天明六年十一月朔日	十二月廿四日

才五巻  
才六巻  
才七巻  
才八巻  
才九巻  
才十巻  
才十一巻  
才十二巻  
才十三巻  
才十四巻  
才十五巻  
才十六巻

天明七年正月一日 — 四月七日

天明八年五月廿六日 — 十二月末日

天明九年正月一日 — 三月十二日

寛政二年五月 — 十二月末日

寛政三年正月一日 — 五月一日

④ 東申信仰の研究 學術振興會、昭和36年刊

東申信仰の研究 年譜篇 帝國書院 昭和38年刊

⑤ 西湖之向とは、弘前城本丸、座敷の西端にあって

諸神を祭り、諸神事を行う間。

⑥ 一在々山伏行人其外墓所野合道筋に有之分は其向

寄弟子親類引取申候附東申塚念佛車建所の儀前々被仰渡候通寺内或は自分屋敷の内に建候儀勝手次才に候街直筋野合に建候儀坐く無用に可仕候

宝永元年十月 被仰出の意

（津輕信政公事稿）

また、信政は東申の夜の習俗を利用して盗賊を一網打尽にしたという逸話がある。（全前書）